

# 薔薇をして語らしめよ

—空間表象の文学—

川崎寿彦著



**I** Et fu venice mest aduis  
De grant enfer en paradis  
Car bel acuel par tout me mane

# 薔薇をして語らしめよ

—空間表象の文学—

川崎寿彦著

名古屋大学出版会

〈著者略歴〉

かわさきとしひこ  
川崎 寿彦

1929年東京に生まれる。1953年京都大学文学部英文科卒業。1958年ウィスコンシン大学より Ph. D. 取得。1974年名古屋大学より文学博士号取得。1977年から名古屋大学文学部教授。1989年没。著書に『庭のイングランド』(名古屋大学出版会), 『英詩再入門』(同), 『森のイングランド』(平凡社), 『楽園と庭』(中央公論社), 『楽園のイングランド』(河出書房新社), 『ダンの世界』(研究社出版), 『マーヴェルの庭』(同), 『鏡のマニエリスム』(同) などがある。

---

薔薇をして語らしめよ—空間表象の文学—

---

1991年6月25日 初版第1刷発行

定価はカバーに  
表示しています

著者 川崎 寿彦

発行者 潮木 守一

---

発行所 財団法人 名古屋大学出版会  
〒464-01 名古屋市中種区不老町 名古屋大学構内  
振替 名古屋 2-11638  
電話(052)781-5027/ FAX(052)781-0697

---

© Michiko Kawasaki 1991

印刷・製本 (株) 太洋社

乱丁・落丁はお取替えいたします。

Printed in Japan

ISBN 4-8158-0161-4

## 第I部 空間表象の文学

バラをして語らしめよ……………	2
静止点としての一七世紀カントリー・ハウス……………	48

## 第II部 一七世紀形而上詩人論

ダンの『第一、第二周年追悼詩』……………	94
——Occasional Poetryとしての考察——	
マーヴェルの「囲われた庭」……………	117
一七世紀の「小さな世界」……………	136
——ある崩壊の過程——	
形而上詩と錬金術……………	154
——ジョンソンとダンを比較して——	
ヘンリー・ウォーンの自然神秘主義……………	174
形而上詩人とミルトン……………	199

第III部 比較のなかの日本文学

世界詩のなかの芭蕉俳句	234
漱石における東洋と西洋	256
あいまいさの効果	269
——『雪国』についての一考察——	
『山の音』の〈家〉と〈人〉	295
——『ハワース・エンド邸』との比較から始めて——	

編者あとがき 345

初出一覧 348

人名索引

第I部

空間表象の文学

## バラをして語らしめよ

エミリーはバラをもっていたか？

フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の “A Rose for Emily” は、彼が作家として最初に発表した短篇小説であり、そして彼の生涯をつうじて最も広く読まれた短篇小説であった。それは一九三〇年四月に『フォーラム』誌 (The Forum) に掲載されたのち、たくさんの作品集、名作短篇アンソロジー、そして教科書等に収録され、さまざまな解釈や論議を呼びながら、今日に至っている。

わが国でも幾つかの翻訳があり、それぞれ「エミリーの薔薇」、「エミリーのためのバラ」……等々と題されている。一般に「エミリーの薔薇」が通りがいいようだ。しかしこれだと、彼女がバラの花をもっていたことになるだろう。はたして彼女はバラをもっていたのか？

物語の舞台は例によってミシシッピ州ヨクナパトリーファ郡ジェファソンという架空の町。(実際にはフォークナー自身が育ったラファイエット郡オクスフォードの町を、モデルにしていると考えられている。) 時代は一九世紀後半から今世紀初め。作品のプロットに周到に組み込まれたクロノロジーを解きほぐしてみると、女主人公エミリー・グリアソンは一八六〇年代に生まれ、一九三〇年代の後半に七四歳の生涯を閉じたことになっている。

グリアソン家はジェファソンの名家。父とエミリーは南部ふうの古い大きな屋敷に住んでいる。南部貴族の時代遅れのブライドから、二人はほとんど町と交際がない。エミリーがほぼ婚期を逸し、三〇歳を過ぎたころ、父は死ぬ。あとはエミリーが、一人の黒人の下男を使って、ひっそりと暮らしていた。

間もなく町に大規模な道路工事が始まり、現場監督として流れ込んで来たのが、陽気な北部人<sup>ヤンキ</sup>の大男、ホーマー・バロンであった。そして、町の人びとが仰天したことに、この厚かましい日傭い労働者は、人もあろうに南部名家の老嬢エミリーとデートを始めたのである。白昼堂々とドライブ用馬車を駆って遊び回る二人の姿が、たびたび見られるようになった。

町の反応は複雑であった。保守派はもちろん顔をしかめた。しかし若い世代はむしろ同情的だった。どんなかたちでも、どんな相手とでも、孤独な老嬢が結婚をして、しあわせになってくれることを、彼等はねがったのである。

だがロマンスは続いて、結婚はやってこなかった。町の酒場でホーマーが、おれは結婚なんかしないさ、とうそぶくのを、人びとは聞いた。町の長老の差し金で、エミリーの親戚が遠くから呼び寄せられ、情勢は緊迫する。町の人びとは一喜一憂した。エミリーが男物の化粧セットと衣類一式を（寝巻まで含めて）買いこんだとき、「やはり彼女は結婚するんだ」と胸を撫で下ろした。しかし彼女が薬局で殺鼠剤を買ったとき、「彼女は自殺するんだ」と、同じ程度の満足感でささやき合った。

実際にはそのどちらも起こらなかった。親戚は去り、ホーマーは三日後に一旦こっそり彼女を訪ねたものの、その後ふたたび町に姿を見せなかった。結局エミリーは捨てられたのだ（と人びとは考えた）。その後の彼女の、まったく孤独な四〇年の生涯。屋敷は朽ち、彼女の髪は鉄錆色の白髪に変わっていく。たった一人の黒人の老僕も老いた。そしてついに彼女が死んだとき、町の人びとは深い哀惜の念と、かなりな好奇心でもって、過去何十年も閉ざされ



たままであつた家の内部を見て回る。二階には嚴重に鍵をかけたままの一室があつた。ドアを打ち破つて人びとはその部屋に入る。何十年もの間に積もつた埃に覆われてはいたが、それはどうやら新婚夫婦のためにしつらえられた寝室であつたらしい。そしてダブルベッドの片方に寝るのは、朽ちてたホーマー・バロンの屍体。もう一方の枕の上には一本の長い鉄錆色がかつた白髪 (“a long strand of iron-gray hair”) ……。

……と、これがこの短篇のプロットである。見事なスリラー仕立てであつて、最後のショッキングなどんでん返しまで、水も洩らさぬ筆の運びは感嘆のほかない。途中でヒントになるかもしれない部分は、全部巧妙に話の流れのなかに沈めてしまつてある。たとえばエミリーが殺鼠剤を買つた噂が伝わつても、町の人びとは彼女の自殺のことしか考えないし、彼女の屋敷から悪臭が漂い始めた一時期にも、黒人の男に台所をまかせておくからこんなことになるんだと、白人の主婦達の奇妙な優越感をくすぐつただけだつた。

さて、このように作品を概観してみると、どうしてもあることに気付かざるをえない。それは、エミリーがバラをもつていないということである。それどころか、バラの花は作品中に一度も登場しない。強いて“rose”という言葉を探しても、以下のような形容詞用法が見つかるだけである。場面は町の人びとが、最後の密室に押し入るところ――

ドアをめりめりと押し破る音は、この一面に埃の積もつた部屋に響き渡るようだつた。いたる所に、まるで墓の覆いのような、薄い、つんと鼻にくる幕がかぶさつてゐる感じだつたが、その部屋はどうやら新婚部屋用に飾られ、しつらえられていた。あせたバラ色のベッドの天蓋のカーテン (“the valance curtains of faded rose color”) の上にも、バラ色のシェードをつけた照明 (“the rose-shaded lights”) の上にも、鏡台の上にも、きちんと並べられたコップ類や男物化粧セットの上にも……。

だとすると作品の題“A Rose for Emily”は、何か別な意味をもたなければならぬ。このことはこれまで多くの読者を悩ませてきた。生前の作者に直接問いただしたものもある。

学生の質問——「A Rose for Emily」という題の意味は何ですか？」

作者の答え——「ああ、それはあのかわいそうな女が人生らしい人生を生きなかったということだけです。まあいわばお父さんが彼女を家に閉じこめていたようなもので、そのあと彼女は恋人を見つけたんだが、彼に捨てられそうになる、そこで彼女は恋人を殺さなければならなかった。それは「エミリーのための一輪のバラ」に過ぎなかった——それだけのことでしょ。<sup>1)</sup>」

これはもちろん答えになっていない。故意か無意識か、作者は明確な答えを出さない、またはそれが出せないであろう。強いて作者に好意的に解釈すれば、彼は「一輪のバラ」という表現に「一つの愛の体験（または思い出）」という象徴的意味を与えているのだろうか。

じつはこれより数年前、フォークナーは日本人の研究者から同じ質問を向けられ、その時は違った答えをしているのである。

作品の題の意味はといえば、ここに一人の女がいて、彼女は悲劇を、取り返しのつかない悲劇を体験した、それはもうどうにもならなかった、そこで私は彼女を憐れみ、そこでこの作品は一つの敬意の挨拶（*a salute*）なのです。皆さんが、相手は誰にしろ、こちらの気持を表わすために挨拶をするようにね。相手が男なら一杯の酒で乾杯といくでしょう。それが女なら一輪のバラを捧げるのです。<sup>2)</sup>

つまりここでは作品自体が作者によって女主人公に捧げられる、敬愛のしるしとしての「一輪のバラ」だということになってゐる。

しかしここでも、作者の口調——とくに引用後半の部分の——に耳を澄ませばよくわかるように、いささか食わせものなのである。そもそもフォークナーは、自作の題の解説者として、あまり信用のできる相手ではない。一般論として作者というものは、自作の内容や題の意味などを、正しく、あるいは本気で、解説しない——または出来ない——ことが多いのだが、フォークナーはそのなかでもたちの悪い方ではなからうか。「八月の光」や『野性の棕櫚』についての彼の「解説」が、そのよい例である。

だとすれば「エミリーの（ための）バラ」は、題からしてミステリーをはらんだ作品だということになる。内容に至っては、いつそう不可解な部分をひそめて、読者の解明を待っているのである。

エミリーは屍体と寝ていたのか？

作品の不可解さの一つは、あのクライマックス、あの最後のどんでん返しの部分にかかわっている。これは作品全体のメカニズムの中心軸なのだから、ゆゆしきミステリーと呼ぶべきであろう。いまその部分を引用してみる。町の人びとが男の屍体を発見したところからである。

彼の肉体の成れの果ては、腐った寝巻の下で朽ち、寝ていたベッドから引き離せなくなってしまっていた。そして体の上にも、側の枕の上にも、一面にあの辛抱強く動こうとしない埃がおおっていた。

つぎに目を移すと、隣りの枕には頭の重みで出来たくぼみがあった。一人がそこから何かをつまみ上げ、身をかがめてそれに目をこらした。あのかすかな、目に見えない、乾いた埃の匂いが鼻につんと来て、われわれはそれが一本の、長い、鉄錆色がかった白髪であることを見たのである。

ここで作品は終る。読者は作品の途中の段階で、エミリーの髪が鉄錆色の白髪に変ったことを知らされているから、

最後の枕の上の髪の毛が誰のものであったか、疑問の余地はない。

にもかかわらず、問題はそこから始まるのである。いったいエミリーは、いつごろ、どんな状況の下で、その白髪をそこに残したのか？

多くの読者は、エミリーがずっと屍体と寝ていたという印象を、とっさに受けるようだ。

彼女が死ぬと町の人びとはその家に入る。そして恐怖とともに、彼女がこの年月の間ずっと、ホームーの屍体と寝ていたことを発見するのだ。<sup>③</sup>

というような解説にも、それが示されている。またトリリングの書評は、この作品に対して最も早く下された評価を表わしているが、同じ読み方だったといえるだろう。なぜならそれはこの作品を、「愛人を殺害し、その腐った屍体の側で長年寝ていた女の物語」と呼んでいるから。<sup>④</sup>

トリリングの作品評価はこの読み方から出発しており、したがってかなり低いものであった。要するにこの短篇は、安っぽい恐怖小説だ、というに尽きる。これに対し、この種の評価を直すために、出発点としての解釈自体に疑問を投げかける批評家もあった。たとえば、エミリーは屍体とはまったく寝ていない、枕の上の髪の毛は殺人の夜に残されたものだ、というような読み方がある。その根拠は作品のなかで、「過去四〇年間、誰もその部屋のなかを見た者はなかった」と明記されていること、密室が開かれたとき、内部は全体が一面に埃におおわれていたこと、などである。<sup>⑤</sup>

いまここに、「エミリーはずっと屍体と寝ていた」という説を④、「エミリーはまったく屍体と寝ていなかった」という説を⑤とおこう。④も⑤も、それぞれに難点があることは明らかである。

もし④だとすると、「エミリーの（ための）バラ」はまさしく身の毛もよだつ恐怖小説ということになる。しか

しこの説だと、部屋一面の埃が説明できない。長年かかつて積もった埃だということは、誰の目にも疑えないからである。

⑧は④に比べて、品のよい読み方といえるかもしれない。このエミリーなら作者または読者から、一輪の愛惜のバラを贈られるにふさわしいかもしれない。だが最後の「一本の長い鉄錆色がかった白髪」という、いわば決め手の証拠物件(?)が、説明困難となるのではなからうか? 作者は彼女の髪の毛について、克明にその変化を記録しているのである。順を追ってそれをたどると、(1)父の死後、彼女は長らく病氣であつたが、病後の彼女の髪は短く切られ、まるで少女のように見えた。(2)恋が破れ、男が姿を消すと、彼女は六カ月ほど家に閉じこもつてしまつたが、その後でふたたび姿を見せたときには肥つて、頭には白髪が混じりかけていた。(3)その後の数年間に白髪はどんどん増えていつて、「胡椒と塩を等分に混ぜたような鉄錆色がかった白髪」(“an even pepper-and-salt iron gray”)にまでなつたが、そこでぴたりと止まつた。(4)その後は七四歳で死ぬまで、ずっと同じであつた。

とすると、犯罪の夜に白髪が残されたという、⑧説はすこし苦しくなる。物件は犯罪遂行後、すくなくとも数年後から、犯人の死の直前までの、どの時点かで残されたと見るほうが自然であろう。

これに対して、いわば④と⑧との中間説がある。エミリーは屍体と寝ていたという点は認めるのだから、仮にこれを④としておくが、ただしそれは彼女の一生のことではなく、途中のある時期までであるとすると、(この説によれば、「過去四〇年間、誰もその部屋の内部を見た者はなかつた」という叙述は、「外部の者は」誰も……なかつた」という読み方になる。⑥)

④説はおそらく基本において正しいだろう。部屋一面に積もった埃の説明もつく。ただしまだ残された問題は、その白髪の実体と、それが遺留された状況のことである。④説をとる一群の批評家達は、もし“a strand of hair”が「一本の髪の毛」だとしたら、枕の上に積もった何十年(三五年? 三〇年?)かの埃におおわれてしまつて、最後

の外部からの闖入者達の目にはとまらなかつたのではないかと推理する。

では“a strand of hair”は何か？ それは“a lock of hair”（毛の一房）である。そしてそれが屍体の側に残されていたという事実は、偶然では起こりえないことだから、エミリーの故意の行為の結果と考えなければなるまい。なぜか？ それは古代ギリシア以来の、悲嘆と惜別の情を表わす習慣であつたという。エミリーはある時点でホームー（なんとギリシア的な名前！）の朽ちゆく屍体の傍に、切り取つた自分の髪の一房を置いたのだ——ちようどホメロスの叙事詩のなかでアキレスがパトロクロスの墓に向かつてそうしたように。またエウリピデスの悲劇のなかでオレステースが彼の父の墓に向かつてそうしたように……。

いちおうなるほどと思わせる説明だが、よく考えればこれもすこし綺麗ごとには過ぎるのではないだろうか？ たしかにエミリーは悲劇的だし、ある意味では英雄的ですらある。だが私には彼女が、ギリシア型の英雄悲劇を演じたとは考えにくい。

髪 of 毛の実体については、もともと“strand”という言葉が毛髪に当てはめられた場合、“a tress”（一房）も“a filament”（一本）をも指し得るから、曖昧であることは認めなければならぬ。しかし私は、故意に残された一房の毛よりは、偶然そこに残つた一本の毛と考へたい。それは作者がその髪を、「頭の重みで出来た枕のくぼみ」にあつたと明記し、つまり彼女がそこに寝ていた行為と結びつけようとしているからである。なるほど一本の髪 of 毛は、埃の下では目につきにくかつたかもしれない。だが作者はけつしてその埃が、「厚く」積もつていたとは書いていない。むしろ逆に「薄く、つんとくる、墓おおいのように」（“a thin, acrid, pall as of the tomb”）と、薄さを強調しているのである。

作者はたしかに、自分でも語っているように、彼の女主人公を憐れみ、そして愛していただろう。だが彼の同情は複雑に屈折した感情であつた。それは彼が故郷の南部そのものに対して抱いていた憎・愛の感情と、共通・等質

な感情だったのではないかと考えられる。彼はエミリーの身の毛もよだつ<sup>ネクロワイフ</sup>へ屍体愛<sup>ネクロワイフ</sup>を、正面から描いている。さらに彼は、エミリーの家系には狂気の血筋があり、彼女の大伯母は最後に完全に発狂した事実を、町の人びとに思ひ出させている。はつきりいえば、エミリーもその限りで気が狂っていたのだ。

その狂気にもかかわらず、いやむしろ、その狂気のゆえに、フォークナーはエミリーを憐れみ、愛した。この作品はけっしてトリリングが最初に考えたような、「とくに深い意味のない」(“without implication”)恐怖小説なのではなく、じつに幾層もの深層構造をもった作品なのではあるまいか。

そしてその深層の意味を掘り起こす手づるは、依然として作品の不可解な題に、とくにその「ヘバラ」という暗喩にこめられているように感じられる。以下「ヘバラ」をして語らしめよう。西欧文学の歴史のなかで、バラの象徴がどのような機能を果たしてきたか、それが最後にはフォークナー作品にどのようなに取り入れられているかを見てみよう。

### 赤いバラはヴィーナスの花であった

西欧社会では、ギリシア・ローマの昔から、バラは花の女王であり、ときに花そのものですらあつた。この意味でバラは、ちようどわが国でサクラがそうであつたように、特定の文化が「花」というものに与える豊富な象徴性を、そっくりになうことになる。

どの文化においても、花は美の象徴である。またどの民族も、植物の営み、とくに蕾↓開花↓結実と推移する花の生命に、強く性的な暗示を受けることが多かった。したがって西欧社会で、バラが早い時代から女性の官能美の表象<sup>エフェム</sup>となつたことは、ごく自然であつたらう。

神話的背景においては、バラは、ずばり、アフロディテ(ヴィーナス)の花であつた。とはいえバラには昔から、

赤と白の色がある。赤いバラはいかにも官能美の女王ヴィーナスにふさわしいし、事実ローマ時代にはその用法がはつきり確立していたけれど、白いバラはたしてどうだろうか。ギリシア神話の断片には、美の女神アフロディテが、息子である愛の神エロス（キューピッド）に赤と白のバラを与えたが、前者は愛欲を、後者は無垢の魅力を象徴することになったと、そのいきさつが語られている。赤と白のバラを象徴的に使い分ける必要性は、西欧文明の最初期から気付かれていたわけである。

一つの伝説によれば、バラという花はもともと白かったのだそうだ。ところがヴィーナスの愛人アドーニス猪の牙にかかり、彼の血でバラはまっ赤に染まったという。また別な説では、その悲鳴を聞いて駆けつけた美の女神の足がバラのとげで傷つけられ、彼女の血で花は赤く染まったとされている。赤いバラは、だから、愛欲の花である。ヨーロッパ各地で今も祝われるアドーニス祭は、アドーニスがあネモネとして復活することを祝う春の祝祭であるが、同時にヴィーナスの血による「バラの色染め」の儀式も行われているという。

こうしてヴィーナスのバラは、なんといってもやはり赤でなければならなかった。ローマ時代の象徴的用法（いわば花言葉）によれば、ヴィーナスの赤いバラは「勝ち誇る愛」を表わした。花の女王だったのである。その後も、祖型の土壌に根ざし、伝承の支柱に支えられて、西欧の赤いバラは輪郭鮮明な象徴の花を咲かせ続けた。中世・近代・現代を通じ、この花を右に置いて、肉欲の愛を表わす表象はなかった。大英博物館で『バラ物語』(Roman de la Rose)の美しい挿し絵(西暦一五〇〇年前後、フランドル地方制作)を見ると、恋人の探求するバラは、すべて色あざやかな赤に描かれている。そして一八世紀スコットランドの農民詩人は、忘れ難い声で次のように歌った。

ああ、僕の恋人は真つ赤な真つ赤なバラ、

六月に咲き初めたばかりの花。



ああ、僕の恋人は甘く奏でる  
麗しの楽の調べのようだ。

そして二〇世紀後半のわが国で、次のようなフォークソングが愛唱されたとき、それを口々に歌った人びとは、西欧の伝承に反応していたとは思えないけれど、無意識に一つの人類共通の〈祖型〉に反応していたということには、じゅうぶん考えられることなのである。

バラが咲いたバラが咲いた真赤なバラが

淋しかった僕の庭に　バラが咲いた

たった一つ咲いたバラ　小さなバラで

淋しかった僕の庭が　明るくなつた

バラよバラよ　小さなバラ

いつまでも　そこに咲いてておくれ……。

### 白いバラは処女マリアの花

可憐な初恋もあろうし、官能にただれる肉欲の恋もあるだろうが、総じて赤いバラは地上の愛欲のエンブレムであった。これに対して白いバラが、早くもギリシア神話のなかで、純真・無垢の表象と規定されていることは、すでに述べた。これも一つの祖型的な反応と呼ぶべきであろう。

二〇世紀小説から、一つの印象的な場面を引用したい。D・H・ロレンスの『息子達と恋人達』のなかで、少女ミリアムが物語の主人公ポールに、自分が森蔭に見つけておいた白い野バラの茂みを見せる場面である。